

2025 年度 特待入試

第 4 回

国 語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

「次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。」

「おや、あんたか。さっきベル鳴らしたかい？」

「はい、あの、あの、非常の、備えが」

事前に言うことを考えてきたのに、がみババ先生の鋭い目で見られたとたん、ぜんぶ吹っ飛んでしまう。

「落ち着いて話せて前も言ったろう。まあいい、上がりな」

通された和室のちゃぶ台の上には、何冊もの本が開いてあった。ノートには文字や数字がびっしり書きこまれている。

「今、いそがしかったですか？」

「ああ、食堂のメニューを考えてたところさ。年寄りがみんなひましてるところだったら大まちがいだよ」

食堂？ がみババ先生は料理を教えるだけじゃなくて、食堂での仕事もしているんだろうか。

「すみません、じゃあ、また今度に」

「別にいいよ。あたしもちょっと休憩だ」

がみババ先生は鶴を思わせる細長い首をぱきりと鳴らすと、台所から麦茶を二つ持ってきてくれた。

「あの、この前のレモンライスおむすび、サリタちゃん食べてくれました。おいしいって、言ってくれました」

「そりゃ結構なことだね。で、今度は何が起きたんだい」

わたしがここに来た理由が、ほとんど見抜かれているみたい。恐る恐る、サリタちゃんとのトラブルについて話すと、

「つまり、地震で不安定になっているサリタの神経を、あんたのへらへら笑いが逆撫でしたってわけか」

A
と言われ、わたしはうなだれた。

「はい……。おかしくて笑ったわけじゃないって、伝えられなくて。外国人の子とうまく話をするのって、やっぱり難しいんだなって、思いました」

「日本人のあたしとだってうまく話してないけどね」

そのとおり。ますますうなだれるわたしをよそに、がみババ先生は話を続ける。

「ネパールも日本と同じで地震が多い国だって聞くね。何年前、東日本大震災よりもあとに、ネパールでも大地震があったはずだ。テレビのニュースでもやって

たけど、覚えてないかい？」

「覚えてないです」

「そうか。まあ、まだ慣れない国で地震にあったら、だれでもこわいだろうね。あの揺れはまあまあ大きかったし。で、仲直りはできたのかい？」

「まだです。ネパールの子と仲直りするにはどうしたらいいのか、よくわからなくて」

そう答えると、がみババ先生は薄く笑った。

「外国人の子、ネパールの子、か」

「え？」

「まだその段階^①か、と思ってさ。その調子だと、サリタと仲よくなるのはもうちょい先だね」
それは、どういうことだろう？

「あの、わたし、まちがってますか？」

「別にまちがっちゃいないさ。それで、あんたは今日お悩み相談しに来たわけじゃないだろう？ 何を作りたいんだい」
たずねられて、わたしは姿勢を正した。

「サリタちゃんに、非常食を作ってあげたいんです。これからの備えにも、お守りにもなるように。それを渡して、仲直りできたらいいなって思って」
そう言うのと、がみババ先生は片眉を上げた。

「仲直りするのに、手土産が必要なのかい？」

「えっ？」

「これをあなたに差し上げますので、その代わり一つよろしくってか。ごめんって言うだけじゃだめなのかい」

「そういうつもりじゃないですけど……ごめんなさいだけだと、わかってもらえないかもしれないし」

わたしの言葉より、作った料理のほうが、わたしの気持ちを伝えてくれそうな気がする。

「ふうん」

興味なさそうに、がみババ先生は頬杖をつく。

この前も思ったけれど、わたしに料理を教えるのは気が進まないんだろうか。申し訳^{もう}なくって、わたしは下を向いた。

「本当は、お父さんとかお母さんに料理を教えてもらえたらいいんですけど」

「なんでもかんでも家族だけで解決する必要はないだろ」

がみババ先生は腕組みすると、長い息を吐いて立ち上がった。

「サリタの食べられないものとか、アレルギーはあるかとか、そのへんはわかってんのかい？」

「ええと、ネパールの人は牛と豚を食べない人が多いって本に書いてありました。水牛なら食べるそうです。あと、わたしのお母さんが聞いてくれたんですけど、サリタちゃんにアレルギーはないみたいです」

答えると、ふむ、とがみババ先生はうなずいた。

「非常食、非常食ね。まあ、ちょうどいいか。教えてやるよ」

「え、本当ですか？」

「ああ。でも、ただというわけにはいかないね。一仕事してもらうよ」

がみババ先生はにやりと笑って、わたしを見下ろした。

連れていかれたのは、お店の裏に広がる庭だった。

がみババ先生の台所の窓から見えていた庭だ。草が生え放題で、その中で青い小さな花が建物の壁に沿うように咲いている。野性味あふれる雰囲気^{ふんいき}で、手入れはあまりされていない。

草を刈^かってきれいにして、もっといろんな種類の花を植えてあげて、それから白い丸テーブルといすを置いたら、おしゃれな裏庭になりそうなのにな。

「ほら、ここだよ」

地面に並べられたレンガをまたいで、がみババ先生は一本の木のそばに立った。

「これは、なんの木ですか？」

「ブルーベリーだよ」

そう言って、がみババ先生は親しみをこめた手つきで葉に触^ふれた。

「りっぱなもんだろう？　ここまで大きく堂々と育ったブルーベリーの木はそうそう見ないよ。今年は実が大豊作で、一人じゃ採っても採ってもおっつかない」

「じゃあ仕事って、ブルーベリー摘^つみですか？」

がみババ先生は「そうだよ」とうなずくと、勝手口から家の中に入って、大きなボウルとタオル、それに麦^{むぎ}わら帽子^{ぼうし}を持ってきた。

「摘んだ実はこのボウルに入れるんだ。タオルは首に引っかけといて汗^{あせ}をふきな。暑いからちゃんと帽子もかぶるんだよ。サイズは合わないかもしれないけど、がまんするんだね」

「あ、はい」

「わかったら、C 仕事を始めな」

しゅしゅと手を振^ふって、がみババ先生は去っていく。

料理を教わる前に、仕事かあ。

ここでも雑用が回^かってくるなんて。でも、草むしりをさせられるよりはまだましかも。

わたしはボウルを抱^{かか}えて木に近づいた。甘いにおいにひかれたのか、木の周りをハチがぶんぶん飛んでいる。近くで見る葉は青々としていて、枝には実^④が鈴なりだ。指先にちょっと力を入れるだけでずいぶん D 落ちてくる、ぶっくりと丸い青紫色^{あおむいしい}の実。

ブルーベリーって、こんなに大きかったっけ。食べたことはあるけれど、どんな木に、どんなふうになっているのかも知らなかった。実を摘む感覚が気持ちよくて、どんどん手を動かす。途中で数粒食べてみると、皮がプチッとほじけて、したたかな甘さと、さわやかな酸味が口の中に広がった。

うわあ、おいしい。

たまにつまみ食いをしながら、ボウルに半分ほどブルーベリーがたまったところ、

「おい、そろそろ休憩にしな」

がみババ先生が出てきて、わたしにサイダーの缶を手渡した。これ以上なくらいに冷えたサイダーの、ぱちぱち弾けるのどごしに、ぎゅっと目をつぶる。

「ブルーベリーは食べてみたいかい？」

「はい、甘酸っぱくておいしかったです。この木はがみババ先生が植えたんですか？」

「いや、植えたのはあたしの友だちだよ。もう十年以上前になるかね」

ふっと笑って、がみババ先生は目を細めた。

「あの子がブルーベリーの苗木を持ってきて、ここの裏庭に植えさせてくれて頼んできたんだ。それなら自分んちの庭に植えて、孫のちびどもと実を摘めばいいじゃないかって言ったんだけど、ここがいいって聞かなくてね。『わたしの秘密基地を作るんだから』って」

ブルーベリーの木に語りかけるように、がみババ先生は続けた。

「ま、その気持ちはわかるけどね。学校や家以外にも、自分の基地とか、居場所があるといいと思うよ。心に余裕を持つためにもね」

「じゃあ、その友だちは今もここに來てるんですか？」

「あの子のことだから、氣になってちょいちょい來てると思うよ。あたしにゃ見えないけどね」

「見えない？」

「ああ。今はあの世にいるから」

さらりとがみババ先生が言う。でも、悲しい響きはなかった。お別れをしたんじゃなくて、友だちがちょっと遠くに引っ越したというような、自然な口調だった。

「あ、その友だちって、光ちゃんのおばあちゃん？ どうやって仲よくなったんですか？」

やっぱり、料理がきっかけだったんだろうか。期待してたずねると、

「そうだけど、特別なことはしじゃないよ。いろんなことを話すうちに仲よくなったんだ」

と、がみババ先生はそっけなく答えた。

「ええと、じゃあ、けんかをしたことはありませんか？」

「そりゃあったよ。そのときもいろいろ話をして、仲直りした」

あれ、料理のエピソードが出てこない。首をかしげていると、がみババ先生はにやりとした。

「あたしの答えは期待に添えなかったようだねえ」

「え、いえ、そんな」

「あんたみたいに料理で気持ちを伝えようとするのも悪かないよ。だけどね、料理に頼りすぎるな。大事なことは自分の口で言いな。でないと、相手にきちんと届かないよ」

⑤ 心の中を見透かされたようで、ぎくりとする。

「でも、相手は外国人の子だし、言葉が」

「あのねえ」がみババ先生はわたしをさえぎって続けた。

「世界にはたくさんさんの国があって、そこで生きる人間がいる。言語も習慣もさまざまだ。それでも、『ありがとう』と『ごめんなさい』の気持ちを知らないやつはいないはずだよ」

わたしの手から空になったサイダーの缶を奪うと、がみババ先生はずんずん去っていく。

⑥ しっかりしろと励まされたような、甘えるなど突き放されたような。複雑な気分、わたしはボウルの中のブルーベリーを一粒つまんで口に含んだ。やけに酸っぱかった。

落合由佳『要の台所』より

* がみババ先生……主人公である「わたし」の料理の先生。

* サリタ……「わたし」と同じマンションのとなりの部屋に両親と三人で住むネパール人の女の子。中学一年生である「わたし」の一歳年上。言葉や習慣の違いを笑われたことから学校に通っていない。

* サリタちゃんとのトラブル……地震の揺れにおびえるサリタをなごませようと、「わたし」が笑って声をかけたのを、サリタは日本人と違う言動をおかしいと笑われた経験から「わたし」にもばかにされたと誤解して傷ついてしまった。

* 光ちゃん……「わたし」の親しい友人。「わたし」にがみババ先生を紹介した。

問一 本文中の A 〃 D に入る語句として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア とっとと イ ずばっと ウ ぼろりと エ こんもりと

問二 — 部①「その段階」とありますが、その説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」が日本とネパールの文化の違いを大切にしているということ。

イ 「わたし」のネパールに対する理解が不十分であるということ。

ウ 「わたし」が一人の人間としてサリタを見ていないということ。

エ 「わたし」がまだ親しくもなっていない子を信頼できないということ。

問三 — 部②「わたしの気持ち」について、どのような気持ちか説明しなさい。

問四 — 部③「親しみをこめた手つきで葉に触れた」とありますが、なぜですか。理由として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 料理に使うおいしい果実のとれる、生活に役立つ木だから。

イ 自分とよく似たがんこなけんか友だちを思い出させるから。

ウ よく遊びに来る仲の良い友だちが植えてくれたものだから。

エ 今は亡くなってしまった大切な友だちが植えたものだから。

問五 — 部④「鈴なり」の意味として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 音がしそうな形で実がぶら下がっていること。

イ 果実が枝にたくさん群がって実っていること。

ウ 鈴のようにかわいらしい実がなっていること。

エ 葉が落ちて実だけがびっしりついていること。

問六 — 部⑤「心の中を見透かされたようで、ぎくりとする」とありますが、「わたし」の「心の中」の説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 苦手な言葉で気持ちを伝える努力をせずに料理で仲直りできることを期待した口下手な「わたし」が、がみババからも同じような仲直りの成功例を聞きだして勇気づけられようとしたこと。

イ サリタと仲直りするためのヒントをがみババ先生の体験から得ようとして、「わたし」は根ほり葉ほりけんかの思い出を聞いたが、結局役に立ちそうな話が聞けずがっかりしていること。

ウ 言葉の壁にはばまれ、サリタとけんかしたことに落ち込む「わたし」が、がみババ先生にけんかの話を思い出させることで、同情されなくさめる言葉がもらえることを望んでいたこと。

エ 手作りジャムを渡すことでサリタのきげんをとり仲直りできることを願う「わたし」は、がみババ先生にそれが正しいと方法であると認めてもらい自信をとりもとそうとしたこと。

問七 ―― 部⑥「やけに酸っぱかった」とありますが、そのように感じた理由として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア サリタに日本語が通じないことを理由に、おくりものをして表面的な仲直りができればよいと考えた自分の浅はかさを反省したから。
- イ 本当はサリタのことなどどうでもよくて、自分の気持ちを理解してほしいだけであった自己中心的な「わたし」の本音に驚いたから。
- ウ 文化の違いのせいにして、サリタが「わたし」の思いやりを理解できないことを心のどこかで責めていたことをつきつけられたから。
- エ サリタが外国人であることを言い訳にして、「わたし」がサリタと話し合って気持ちを伝える努力から逃げていることに気づいたから。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

奇数なり偶数なりの属性は、いかにして好き嫌いの対象となり得るのか。この問題に対してこれまで繰り広げてきた議論は、いささか印象論に走り過ぎていたかもしれない。以下では、奇数と偶数が、確かにそれぞれに異なる抽象的な概念と結びついていることを、心理学的な手続きを通して確認していこうと思う。

図2―Aの二つの図形を見て、次の質問に答えてほしい。これらの形は、ある遠く離れた知的生命体の住む星の中で使われている数学記号で、一方が奇数でもう一方が偶数を表す。どちらが奇数でどちらが偶数だろうか。僕は自分か受け持っている授業で、毎年この質問を学生に投げかける。

めらかな図形を偶数と答える。

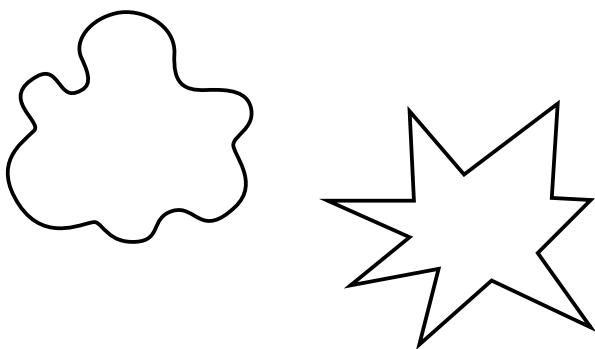
A 70から90パーセントの学生が、角ばった図形を奇数、な

この質問は僕自身の着想によるものだが、言語学の世界では非常に有名な元ネタがある。オリジナルの質問は「一方がブーバ、もう一方がキキと発音する。どちらがブーバで、どちらがキキ？」というものだ。この実験についてはさまざまな報告があるが、それらに共通する傾向として、文化や性別によらず、丸い図形をブーバ、角ばった図形をキキと答える割合が圧倒的に高くなる。これをブーバキキ効果という。

なぜ丸い図形がブーバ (Bouba) で、角ばった図形がキキ (Kiki) であり、その逆ではあり得ないのか。この問題を理解してもらうには、ブーバやキキを、普通の意味での単語とは思わずに、擬音語とか擬態語の類だと捉えてみればよい。

丸みを帯びた形状を擬似的に音声化するならば、(例えば) まさにその丸の形状を描いている手の運動が生き生きと連想されるような音声が入るだろう。試しに、鉛筆と紙の擦れる音をアンプリファイしてみよう。それらをあえて文字起こすと、丸であれば「す――さっ、カクカクであれば「すっ、さっ、すっ、さっ」というような表現が適当

図2―A | どちらが奇数でどちらが偶数？



だ。前者は「ブーバ」という音の響きに、後者は「キキ」というリズムによく馴染む。

B 質問に答える人のほとんどは、このような意識的に説明できるようなプロセスを踏んでいるわけではない。それでも、僕たちはこうした感覚間の関連性の濃淡をどこかで了解している。④その種のリアリティーは、僕たちの中にいて、僕たちの手の届かないところで冷徹に作動しているパターン認識によって、自動的に形作られているからだ。

⑤ブーバキキ効果に類する実験で使われる言葉には、(ブーバ／キキ以外にも)いくつかのバリエーションがある。代表的なものとして、「モマ／キピ」や「マルマ／タケテ」が挙げられる。(おそらくあなたの印象の通り) ほぼ全ての人は「モマ・マルマ」が丸い図形、「キピ・タケテ」は角ばった図形を指示する言葉であると感じられる。

「モマ」や「マルマ」には伸ばし棒(長音)が入らないので先程の解釈がピッタリと当てはまるわけではない。

C 「キピ・タケテ」のような音と比べると、どこか柔らかくてふわふわした印象を覚えるのではないだろうか。「n」や「m」は共鳴音と呼ばれ、音波の時系列グラフを見るとわかるように、空気の振動が滑らかに連続的に変化する。逆に「k」や「p」は阻害音と呼ばれ、それまでの流れから、突発的に新たな振動が始まる。

こうした特徴は、ただ単に音声を音波として聴取しているだけでも伝わるが、実際に口を動かして発音する場面では、唇や舌の運動の感覚や気流の触感からより一層に強く感じ取ることができるだろう。そして、これらの運動の感覚は、円や角ばった図形から受ける

☆ な印象と確かによく合致する。

発話に伴う運動感覚が、実際にブーバキキ効果の役に立っていることを示唆する実験がある。スプーンを舌に押し付けて口を閉ざした状態では一部のブーバキキ効果が減退する、というものだ。この減退の程度が特に(聴者よりも)難聴者において顕著だった、という知見はとりわけ重要だ。

D ブーバキキ効果は、純粋に音声を聞き取ることによって駆動されるものと、発話によって駆動されるものと、少なくとも二つの経路から賦活されるものであり、⑥前者のチャンネルが閉ざされている難聴者にとっては、運動イメージを遮断されることの影響がより甚大になる、というわけだ。

小鷹研理『身体がますますわからなくなる』

* 印象論……物事の印象だけで判断すること。

* 擬音語とか擬態語……音や身振りを表して作った語。「がたがた」などの音を元にしたものが擬音語、「ふわふわ」などの状態を元にしたものが擬態語である。

* アンプリファイ……増幅すること。

* プロセス……過程。

* 冷徹……感情に左右されず、物事を冷静に判断する様子。

* 突発的……急に起こること。

* 示唆……それとなく教えること。

* 顕著……きわだって目につき、疑いのない様子。

* 賦活……活力を与えてその物質の機能や作用を活発にすること。

問一 本文中の [A] [D] に当てはまる語として最も適するものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア それでも イ 無論 ウ 要するに エ すると

問二 — 部①「これらの形」とはどのような形か説明しなさい。

問三 — 部②「これをブーバキキ効果という」とあるが、ブーバキキ効果はなぜおきるのか。その理由をまとめた次の文の [a] [c] に当てはまる語を本文中から [a] は二字、[b] は四字、[c] は二字で抜き出しなさい。

図形を実際に書くときに生じる [a] や [b] がそれぞれの図形を [c] させるから。

問四 — 部③「あえて」とあるが、この語を用いた次の文のうち、「あえて」の用法として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家に帰り手を洗ったあと、あえてタオルで手をふいた。

イ 私は怖がりなので反対されたが、あえてお化け屋敷に入った。

ウ あえて毎朝の習慣であるランニングを今日も公園で行った。

エ 私は国語が一番好きな科目なので、あえて毎日勉強している。

問五 — 部④「その種のリアリティーはくからだ」とはどういうことですか。その説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間が努力することによってのみ言葉から感覚的なイメージを生み出すことができるということ。

イ 一部の想像力の強い人間だけが言葉から感覚的なイメージを生み出すことができるということ。

ウ 人間の冷静な判断能力によって言葉から感覚的なイメージを生み出すことができるということ。

エ 無意識的なプロセスによって言葉から感覚的なイメージを生み出すことができるということ。

問六 — 部⑤「ブーバキキ効果に類するバリエーションがある」とありますが、あなたの考える「ブーバ」「キキ」に類する語をそれぞれカタカナで答えなさい。ただし本文に登場する「ブーバ」「キキ」「モマ」「キピ」「マルマ」「タケテ」以外で答えること。

問七 本文中の ☆ に当てはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 視覚的 イ 聴覚的 ウ 全体的 エ 部分的

問八——部⑥「前者のチャンネル」とは何を指しますか。本文中から二十三字で抜き出し最初と最後の三字で答えなさい。

問九 この文章の内容を説明した次の選択肢のうち、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が奇数と偶数に対して抱くイメージにはある程度共通する傾向がある。
- イ 共鳴音は空気の振動が連続的に変化し、聞く人にやわらかな印象を与える。
- ウ ブーバキキ効果は実際にその単語を口にすることでより強く感じられる。
- エ 聴力が低下した難聴者はブーバキキ効果の影響を一切受けることがない。

三 次の四字熟語の空らんを埋めなさい。

- 1 ☐日☐秋（非常に待ち遠しいこと）
- 2 ☐今☐西（いつでもどこでも）
- 3 ☐適☐適（人に合った役目があるということ）
- 4 ☐束☐文（数が多くても大した金額にならないということ）
- 5 臨機☐☐（状況に応じた対応をすること）

四 次の傍線部のカタカナを漢字になおしなさい。

- 1 ガンゼンには絶景が広がっている。
- 2 ギンガ系について研究する。
- 3 この先の道はブンキしている。
- 4 明日はソフの家に行くことになっている。
- 5 このビルはテッキンコンクリートできている。

